

人を大切にすること

講演	工藤 和男〔くどう・かずお〕
講師紹介	同志社大学名誉教授

本日は皆さんにお話しする機会を与えていただき、たいへん嬉しく思っております。私は二〇一六年三月に定年で同志社大学を退職するまで「倫理学」を担当しておりましたが、これは人間の生き方について考える専門分野でして、そのいろいろな善き生き方の最終的に行き着くところは結局「人を大切にすること」という一点にたどり着くのではないかと確信するようになりました。本日はそのテーマでお話ししたいと存じます。

一人一人は大切なり

さて、新町キャンパスの尋真館の渡り廊下に新島襄の「一人一人は大切なり」という言葉が掲げられているのは皆さんご存知のとおりです。この言葉は一八八五年同志社の創立一〇周年の式典で、自分のアメリカ滞在中に退学処分を受けてしまった学生のことをとり上げて、「諸君よ、一人一人は大切なり」と呼びかけたものです。その前年に新島自身の関与できなかったその処分を悔いて、今後同志社のなかで学生の進むべき道を安易に断ち切ることのないようにと戒める言葉でありました（『新島襄全集』1、一〇七頁）。

創立一〇年を振り返るなかでこの言葉が発せられた意味はとても重いと思います。同志社英学校がようやく制度も整い学生も増えてくるに従い、ややもすると、日本の将来を託すべき若者たちの一人ひとりの特長を伸ばすべく全人教育を目指した最初の志を見失いがちになり、型に合わない学生を除外するようになることは、新島の最も危惧したことでありましょう。それは、遺言でも「傀儡不羈なる書生」を、すなわち、枠からはみ出るような才能と行動の学生を押さえつけずにその長所を伸ばすように、と言い残したところにも表れています（『新島襄全集』4、四〇三頁）。型にはめるのではなく長所を引き出すこと、そのようなエデュケーション（教育）の本来の意味を体現した新島の精神を同志社は常に顧みて実践してゆかねばなりません。

さらに、「一人」は大切なり、という言い方にも注目しましょう。新島にとって誰もが大切であるのは確かです。しかし、その眼差しは全員全体に向けられているのではなく、いつも一人ひとりに向けられているのです。「一人一人」という発言は退学させられた七人のそれぞれの学生を念頭に置いた痛切な思いです。新島は『マタイによる福音書』（一八章）のあの「迷い出た羊」を思い浮かべていたに違いありません。この話は、羊飼いは一匹の羊が迷い出たら残りの九九匹を差し置いても探しに行くのだ、という極端なものです。一匹のために残りを蔑ろにしてもよいのでしょうか。たしかに、全体に目を向ければ九九匹のほうが大事になるかもしれません。でも、その場その時にその助けを最も必要としているのはどちらでしょうか。大切なのは羊飼いの、つまりイエスを呼び求めているその一匹の羊なのです。新島は、同志社で勉学を続けてゆける多くの学生にも増して、まずは退学処分を受けた学生の一人ひとりの苦悩に対して深く案じていたと思われます。

ところで今、「大事」と「大切」という言葉を出しました。皆さんはこの二つを区別するでしょうか。現在はほぼ同じ意味で使いますね。もともと、「大事」は重大なこと、容易ならぬことですし、「大切」はたいへんに切迫したことから、私はこの元の意味からヒントを得て、わずかですがとても重大な違いをもつ意味を区別して使いたいと思います。「大切」は今述べたように困難が差し迫ったもの、切に助けを求めているものに必要です。このとき一匹が特に優れているとか、九九匹が劣っているとか価値づけがなされているわけではありません。これに対して「大事」は重要かそうでないかが無意識にも評価された上でその度合いの大きいほうに目が向いています。どちらも現在では、大事にする、大切にすること、とほぼ同じ意味になっていますが、この区別はまた後であらためて考えてみます。

以上のように、新島の「一人一人は大切なり」は、その場その時に困難を抱えているまさしくその一人の人にこそ眼差しが向けられるべきであることを示しています。

愛の三様の姿

さて、人を大切にすることを経クリスト者である新島の精神からあらためて考えてみましょう。キリスト教は愛の宗教であると言われる。この愛をどう考えたらよいでしょうか。

日本に初めてキリスト教が伝わった室町から戦国時代の頃、その教義の核心である「愛」を宣教師たちは日本語でどう表したのかと苦労したようです。愛という言葉はあったのですが、仏教ではこれが渴愛や愛欲という克服すべき煩惱の最たるものとされていたからです。そこで彼らの探し当てた言葉が「大切」でした。そのことは『日葡辞書』（一六〇三年に作られた日本語―ポルトガル語の辞典。『邦訳日葡辞書』（岩波書店、一九八〇年）は図書館の参考図書869/V2）に載っています。愛はラテン語聖典ではカリタス、ポルトガル語ではアモールですが、『日葡辞書』では日本語の「恋」と「大切」とがアモールとされています。恋のほうのアモールはとういてキリスト教の愛ではありませんね。

実は、古代のギリシアでは現在「愛」と呼ばれる内容にエロースとアガペー、フィリアという意味合いの違いが知られていました。

まず、エロースは、自分にとって何らかの価値が感じられ、それを求め、それに近づき、所有したい、一体となりたいという心の動きであり、「好きになる＝感情の愛」と言ってよいでしょう。プラトンという古代ギリシアの哲学者は、エロースを真善美という至高の価値への憧れでもあるとして、学問道徳芸術の原動力であると解釈しました（『饗宴』）が、普通に考えれば、恋愛、性愛がまさしくこれですね。恋愛は、必ずしも本人の意識にのぼっているわけではありませんが、自分の気持ちに惹かれる相手の価値が、美しいとか優しいとか魅力的な何かが、心を動かしているのです。自分にとって魅力あるものへと心が自然に惹かれるわけです。ですから、この愛は好き嫌いという自然に沸き起こる感情であって、自由に左右できませんし、選択できません。顔や行動に表れるのを抑えたり、沈黙化するのを待ったりはできますが、その感情が生じたことをなかつたことにはできません。

これに対してアガペーは、価値の有る無しに関わりなく、また、見返りを求めずに、必要とされるものを与えようとする意志の働きであり、まさしく大切にすることということです。キリスト教は、神の人間への愛こそがそれであるとし、神の似姿としての人間もまたこれを隣人愛として実践すべきであり、そこに神のたいなる働きの具現を見たのでした（Ⅰヨハネ四・七―二一）。弱きもの、小さきものへの慈しみにもその姿を見ることができます。仏教では「慈悲」がこのアガペーにあたるのですが、人間同士よりも、仏から人間への働きに意味が限定されがちでした。

アガペーは、感情としての愛情ではなく、「大切にすること＝意志の愛」です。嫌いなものをそのまま好きになることはできませんが、嫌いなまま大切にすることはできます。イエスはこのことを「敵をも愛せよ」という極端な例（マタイ五・四四）で示しました。また、隣人愛についても「善きサマリヤ人」の喩え（ルカ一〇・二五―三七）で、隣人とは必ずしも身近な人や好きな人ではないことを明らかにしています。サマリヤ人は、ユダヤ教に改宗したけれど民族が違い、ユダヤ人からするといわばよそ者でした。ですから、「隣人愛」の隣人とは身近な親しい人ではなく、目の前に現れた（意識にのぼった）切に助けを必要としている人のことなのです。愛せよという命令は行為を引き起こす意志に向けられているのであり、逆に、好きになれという感情への命令は不可能ですし無意味です。皆さんには、ストーカーの勘違いはこの取り違えにあるということがお分かりでしょう。

もう一つのフィリアは、やはり古代ギリシアのアリストテレスという哲学者が人間のあるべき最も望ましい姿として描いた「友愛」のことです（『ニコマコス倫理学』）。広い意味で敵対関係にない人との友好的関係を指し、嫌いではないという範囲に入る人々に限られてはいますが、同じ世界を共有する間柄に成立する愛の姿です。私はこれを広く信頼し合う心構え、つまり「信頼する＝態度の愛」と呼びたいと思います。

以上のように、愛には三様の姿が考えられるわけです。エロースという好きになる感情そのものは自分の左右できないもので、この愛情は、そのなかに必ず心惹かれる好ましき価値が感じ取られ、これによって沸き起こっています。フィリアも広い意味で好ましいという価値に基づいていますが、心構えですから左右できる要素が出てきます。特に、批判や忠告やアドバイスも含んで友情を育もうとする態度はとても望ましいことです。しかし、大切にすることアガペーは、愛情や友情とは異なっており、はっきりと意志的決断によって成り立っているのです。キリスト教の核心である愛は、この大切にすることアガペー（ラテン語に翻訳されてカリタス）、すなわち、好き嫌いを越え出て大切にすること意志からの行為であることを確認したいと思います。

もちろん、現実の普段の私たちの愛のあり方は、これら三様の姿が混じり合ったものですね。ですから、好ましい人や親しい人を大切にすることは私たちを最も幸せにするものです。でも、サマリヤ人のように特に親しさを感じなくても、イエスの示すように敵であっても、人を大切にすることは可能ですし、たいへんに難しいけれど人間の為すべき最善のことなのです。一八世紀のカントという哲学者は、このような、たとえ憎しみをもったとしても為されるべき親切こそが本当の善であると説き、これにあの文豪シラーが、友情からの親切が本当の善でないなら、友情を捨てて憎みながら親切にすべきなのか、と皮肉を言いましたが、これは、文豪の間違いです。カントの言いたいことは、友情と混じり合った親切がもし友人でなければ為されないようなものだったら、それは大切にすること本当の愛、無条件の真正な善ではない、ということです。このように、人を大切にすることアガペーは善く生きることの完成された姿、究極の理念と考えられるのです。

親しみや近しさの感情からは自然に親切がなされるでしょう。それには何の問題もないわけです。しかし、「一人一人は大切なり」と意識し、大切にしようとする行為は、近しい人や好きな人だからではなくても為されるべきアガペーとしての愛でなければなりません。新島のあの言葉は、そのようなキリスト教の核心となる愛の精神から生まれたのでした。

二つの物差し

先に、「大事」と「大切」の区別をしました。大事は自分にとっての価値（重要性）に基づいているのに対して、大切は切迫した必要に応えることであって、相手を評価することからは独立しています。このことを確認するために、少し回り路になりますが、二つの物差しという考え方をとり上げてみます。

ひろさちやという宗教学者が、人間は二つの物差しを必要とすると述べています（『「世逃げ」のすすめ』集英社新書、二〇〇八年）。それは「世間の物差し」と「神・仏の物差し」です。世間の物差しには目盛りがあって、人間の能力や優劣や功罪、魅力、好ましさなどをしっかりと計ってくれます。ところが神・仏の物差しには目盛りがありませんから、計ることができませんし、むしろ計ってはいけません。ひろは、インド民話で、夫と弟と息子とが泥棒の罪で死刑を宣告され、王様に懇願した結果一人だけを助けると言われた女の話を取り上げています。この場合誰かを選んだなら、実際に助けられても助けられなくても、女性には地獄のようなその後が待っているでしょう。ひろは、だから選んではいけない、仏の物差しに任すべきだと

言うのです。

さて、私たちは常日頃「世間の物差し」で生きています。例えば、できるとかできない、美しいとか美しくない、才能があるとかない、裕福とか貧乏な、などと評価しますし、また評価されます。学校の成績評価や入学試験の偏差値、会社での人事課や昇進、給与などもそうですね。そしてこれらは社会が成り立つ上で絶対に必要なものです。私も学生の成績はしっかりと優秀を判定して成績をつけましたよ。しかし問題は、人間にはこの物差しだけしかないと思い込んでしまうことです。

そうではもう一つの「神・仏の物差し」があることに気づかねばなりません。希望の大学に入らなかった、就活の最終面接で落とされてしまった、会社で自分だけが昇進できない、など自分の望ましい状態から外れていると感じる時、それはことごとく世間の物差しによる評価に基づく悩みのです。場合によっては絶望の淵に追いやられる人もいられるかもしれません。でもその時、別の物差しがあるぞ、その目盛りのない、つまり人間には計り知れない評価が待っているぞ、ということに思い至ればどうでしょうか。逆に、世間の物差しでたいへんに評価されるような状態にあって得意満面になっている時にも、もう一つの物差しではどうなのだろうかと、と立ち留まってみればどうでしょうか。どちらの場合も、一つの考えに頭が占領されている状態から抜け出て、私たちは新しい気づきに至り、まったく異なる目を開くことができるようになるでしょう。

ひろさちやの本の「世逃げ」というタイトルも、このように世間の固定観念から精神的に逃れることを提案しているのです。「出世」というのは（元は出家することでしたが、現在では）世に出ること、つまり世間の物差しで計られて上位になることです。逆に「出世間」つまり「世逃げ」というのは神・仏の物差しの存在に気づいてそれに任せること、つまり世間の物差しから自由になることです。

それでは、この二つの物差しと「大事」と「大切」の区別とはどのように結びつくのでしょうか。もう皆さんはお分りになりかけているでしょう。今度は、そのことを人間が二つの層からなっている存在として考えることと結びつけてみます。

人間の尊厳

「神の物差し」と見てもよい話が『マタイによる福音書』（二〇章）に出てきます。「ぶどう園の労働者」の喩えです。ぶどう園の主人が朝、広場にやって来て、働く当てのなかった働き手を雇います。日の入りまで一デナリオンという文句のない労賃の約束です。同じその日にその後三時間おきに四度も同じように雇いましたが、最後の人たちの働いたのはたったの一時間でした。ところが一日の終わりに、主人は最後の人たちから一デナリオンを払います。朝一番から働いた人たちは当然もっともらえると期待しますが、同じ額しかもらえず、不平を言い出します。しかし、主人は彼らに、何の文句があるのか、約束通りではないかと言って帰させます。

この話はとても不公正ですね。二時間働いた人と一時間だけの人とが同じ報酬などひどいじゃないかと思います。現実には決して受け容れられないでしょう。

もちろん、この話は「天の国は次のようにたとえられる」として始まっていますから、現実の常識と噛み合なくても当然かもしれません。しかも、話の前にも終りにも「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」と繰り返されていますから、神学的には、後から啓示を受けた異邦人のほうが救いに近いことや、（最後まで雇われないような）不遇の人にこそ救いの手が差し伸べられること、さらには間違った世俗の考え方を逆転する発想の喩えであると解されているようです。

しかし、この話は、働いた時間に比例する報酬とか功罪への応報とかの「世間の物差し」に對立する「神の物差し」はまさしくこのようなものだという喩えではないのでしょうか。たしかに、神の評価は人間には計り知れないものですが、世間の評価とは隔絶した分け隔てのない神の恵みを示唆していると見ることはできそうです。それでは、世間の物差しが、人間の能力や才能や人気、社会への貢献度、逆に、非効率、無能、害悪など他者にとっては困ること、といった功罪をしっかりと計ってくれるのに対して、目盛りのない神・仏の物差しはいったい人間の何を評価しているのでしょうか。

そこで私は、人間は二つの層からなっており、二つの物差しはそのそれぞれに専用のものではないかと考えるのです。すなわち、万人に分け隔てなく与えられている「いのち」の層と、その上にはじめて成立することのできる、能力がさまざまに開花する層とです。

いのちの層はいわば「神の与える生命の約束」であり、「仏から預かったもの」であります。私たちは誰一人自ら誕生しようとして生まれたわけではありませんね。いのちを与えられて生まれてくことは、ありがたいか迷惑かはともかく、親にとっても自分にとっても文字通り「授かりもの」、否、所有物になるわけではありませんから、「預かりもの」です。そしてこのいのちの層はすべての人にとって生きている限り絶対平等です。ひろさちやは、このように「仏から預かったもの」は世間の物差しで計ってはいけなと言っていたのです。目盛りで計れないものだからです。

しかし、現実人間はまったく平等ではありませんね。いのちの平等なんてただのお題目だ、と皆さんの顔が物語っているようです。でも、それはもう一つの能力の層から見ているからなのです。こちらはもちろん目盛りで計られますから、当然みんなに格差がありますし、現実の社会はその目盛りによって人間を評価し、それに従って、役割や地位、報酬を定めて運営されてゆくわけです。このことは、まったく間違っているのでも改めるべきものでもありません。むしろ、倫理学の世界では伝統的に正義の議論として、そのような能力ないしは社会への貢献に対していかに相応しく報酬や名誉として相応すべきかを議論してきました。実際、能力によらないコネや依怙畚員は誰もが敏感に感じ取る不公平、不正義ですね。

では、人間の平等性を唱えることは意味のないことなのでしょうか。

先に触れた哲学者のカントが、以上の二つの層を「尊厳をもつ人格」と「価格しかため物件」という端的な名称で示しています（『道徳形而上学の基礎づけ』）。この場合「物件」とは人間以外の物だけでなく、例えば、友人のために一肌脱ぐとか会社の業績に貢献したといった、何か別の目的のために手段として役立つ時の人間の物件的な側面、つまり人間の能力の層をも指しています。そしてこの層は、世間の物差しによっていわば「市場価格」としてしっかりと評価されるのです。当然、格差が出ます。でも、この価格や物件、手段という表現は人間を貶めるために言っているものではありません。何かに役立つ手段や価格という側面は誰にも付いて回るものですし、そのような自分の価値を高めようと誰もが日夜努力しているのです。

しかしもう一つの層の尊厳を忘れてはなりません。尊厳はいのちが備えている平等な価値であり、価格の土台をなすものです。能力はいのちがあってこそ発揮されるのですからね。現代は資本主義経済の結果、市場価格がすべての評価を覆うまでに拡がり、その土台である尊厳が多くの人々にとって見失われたり、軽視されたり、価格と取り違えられたりするようになっていますが、尊厳は何かの手段として役立つような価値なのではありません。カントは、これを「目的そのもの」の価値であると特徴づけて、「内的な価値」と呼んでいます。

このように、尊厳も価格もどちらも価値なのです。一方の価格は手段の価値ですから、目的次第で変動しますし、その意味で相対的です。例えば、笑顔の素敵な人を私はとても評価しますが、その笑顔はノーベル賞に値する研究者の業績として評価されるわけではないですね。どちらも目盛りで計れますが、目的に従って目盛りが違うのです。他方の尊厳は、何か別のものごとのために評価されるような価値ではありません。つまり、それ自身が目的とみなされるべき価値なのです。

カントのこの目的という概念は、やや理解しづらいと思います。まず、手段との対比で、他の何かのために役立つものではないということが示されています。次に、人間にとって世界のものごとが次のように目的―手段の系列で意味づけられていて、その最終目的の位置に自分が位置づけられることを示しています。例えば、金儲けはくぎを打つため、くぎを打つのは板を止めるため、板を止めるのは家を作るため、家を作るのは人が住むため、そこに住むのは心地よく生きるため、というように私たちは世界を意味づけて見えています。そして、どの人にとっての手段―目的の系列も最終的に人間の、ひいてはその人の生存を最上位の目的としているのです。そして、この人間特有の世界の見方は、人間が自ら目的を設定してそのために考え行為することから生じています。ですから、人間は、すでに定まった目的のための手段にできるだけでなく、常に自分自身の新たな目的を立ててそこへと向かうことのできる存在なのです。このことはまた、既存の枠組みの中でしか存在できない他のもの（物件）に對比して、人格だけがもう根源的な自由をも示しています。

この自由は、実は手段（物件）にもなることを選択できる自由です。人間以外のものは物件にしかかなりえませんが、人間は物件ではない人格としての決断によって他の何かのための手段にもなることができるのです。例えば、今度の日曜日に引越しの手伝いに来てくれないかと友人に頼まれた時に、その手伝いという手段になるか否かを私は選択することができますね。カントは、ここに単なる物件とは異なる「目的そのもの」つまり人格の尊厳を見たのです。

私は、このような尊厳という考え方を、カントによって理性的存在と規定された人格よりも拡張して、人間に与えられたいのちの層、理性には見渡しがたい隠れた層にも当てはめようと思います。人格はいのちに支えられて、そしていのちを引き受けて生きることの上に初めて成立するからです。このいのちを引き受けて生きている限り、人間は絶対的に平等であり、尊厳をもつのです。

ちなみに、このような平等を画一的なものとみはいけません。人間は誰もが、平等に与えられたいのちの層に基づいて、先ほど述べた、目的を設定し、選択する人格の自由をもっています。つまり、そこに個性が現れるのです。この個性は、世間の物差しで計られる能力の層に先立つ土台であり、互いに補い合って社会を形づくる人間のさまざまな異質性、多様性を示しています。その多様性は不平等ですが、能力の層に生じる格差の不平等ではありません。つまり、目盛りでは比べられない不平等なのです。そして、本能だけで生きる画一的に平等な他の動物たちに比べて、その異質性、多様性は人間の尊厳に不可欠です。このような、預かったいのちの平等性と豊かな社会を可能にする個性の不平等とが、より適切に言い換えるなら、誰にも「対等な尊厳」が、能力を発揮する層の大前提として、すべての人間のいのちの層に備わっていることを私たちは忘れてはならないのです。

大切にすべきもの

さて、ようやく「大事にする」と「大切にする」の区別に戻ることができます。そのことによって、人を大切にすることの要点を再確認することにしましょう。

何かを大事にすることは、無意識にもその何かに重要なものを、自分にとって価値ありと感じられるものを見てとって、それを失ったり損なったりしないように気遣うことです。ですから、ここにはわずかなりとも世間の物差しが関与しています。特に、世間の動きに流されやすい人は、世間の評判や価値観に従った価値を、要するに価格で示される何かを尊重するわけです。ですから、大事にするということは自然な心の動きと言ってよいでしょう。大事にしなさいとわざわざ言わなくても、価値を感じ取れば自ずからそれを大事にするはずです。人を大事にする場合も同じことで、エロースやフィリアとも重なりますが、自分から見てその人に備わっている好ましさに目が向いて、それを損なわないようにと、そしておそらく相手からも自分のなかの好ましさを見てとって大事にしたいと、考えるのです。

これに対して、何かを大切にすることは、自分に向かって切に呼びかけてくるものに応えることです。それは、何か切迫した困難を抱えた人から発せられるいのちの声と言うことができます。よくアガペーの具体例に挙げられる赤ちゃんへの愛（母性愛として母親が挙げられる事が多いですが、母親に限らず世話をする周りの者の行為）は、まさしく生きるために助けを必要としている呼びかけへの応答ですね。この愛は、相手のなかに世間の物差しで計られる価値があるからでなく、何らかの見返りを求めるのでもなく、ただただ自分を必要とするものへと一方的に与える愛です。私はこの眼差しの向かう先にこそ、まさしく上で述べた尊厳があるのだと思います。世間の物差しが評価するものとは違う、価格ではない、まったく違う価値、それが尊厳です。これは私を惹きつけるものではなく、私に呼びかけてくるものです。そして、その私への呼びかけは、普段は能力の層に隠れていて気づきたいのですが、いのちの声としてどの人

のなかからも発せられる可能性があるのです。

以上長々とお話ししてきましたが、現代の日本語では同じ意味になっている「大事にする」と「大切にする」の、微妙であるけれど重大な意味の違いを指摘しました。肝心なことは、それらの眼差す対象を取り違えないことなのです。なぜなら、大切にすべき人間の尊厳、それを私に告げ知らせる切迫するいのちの呼びかけは決して、大事にするときのものごとに備わっている価格、好ましき、魅力などにかき消され見失われてはならないからです。現在は、経済的効率を重視した結果、あまりにもすべてを価格化する傾向が強くなっていますが、それは、目盛りで計れないもの、計ってはいけないものに無理矢理目盛りを宛てがうことではないでしょうか。人それぞれの尊さは、社会的地位や収入や見栄えの良さとは別ものであることを忘れてはいけません。

そして、大切にすべきものは、その時その場で私の手助けを必要としている一人ひとりの尊厳です。その場合、あの九九匹の羊に目を向けてはなりません。損得や重要さ、効率や価格によってではなく、その人の発しているいのちの呼びかけにだけ応えるべきだからです。また、人間の力は有限で、多くの人に同時に応えることが不可能だからです。大切にすべきは、つまり、愛すべきはまさに、目の前のその人、イエスの示した意味での隣人、そしてさらにその人のいのちの層の尊厳なのです。

前田英樹というフランス文学者が、新約聖書では律法の要として挙げられた当初（マタイ二二・三七―四〇）の神への愛と隣人愛とが、なぜ隣人愛一つ（ガラテヤ五・一四）に集約されたかを次のように説明しています（『倫理という力』講談社現代新書、二〇〇一年）。神が愛の働きそのものであるならば、隣人愛こそがそこに神の働きの到来していることそのことであり、そしてそれはあらゆるものへの愛の働きなのだ、と。今までお話ししてきたことで言い直せば、大切にするという隣人愛の働きは、神・仏からの預かった私たちのいのちの層の働きが、目の前の人の尊厳あるいのちの層の、やはり神・仏に発するいのちの呼びかけに向かっていることを示しているのです。

パウロは、キリストが私の内に生きたもうと言いました（ガラテヤ二・二〇）。一遍は、念仏を唱えれば自分と仏は一体であると言いました（『一遍上人語録』）。先に私は、人を大切にすることは意志的な行為なのだと言いましたけれども、実は、その行為は他者のいのちの呼びかけに応えようとする私の中のいのちの層の働きなのだと言い換えなければなりません。おそらく、感謝の言葉である「ありがとう」も、私のいのちの層に向けられた相手の親切、つまりその人のいのちの働きに対する私からの応答だろうと思います。現代の私たちは、能力の層に目を奪われるあまり、理性で割り切れるものだけで理解しがちになり、自分に起こることはもっぱら自分の力によるのだと過信するようになっています。しかし、人間の計り知れないことに盲目になってはいけません。目盛りでは計れないいのちの尊厳を世間の物差しで計ってはいけません。私は、東本願寺が掲げる「今、いのちがあなたを生きている」という標語が好きです。神とも仏とも天とも自然とも呼ばれてきた、人間を越え出る大いなる力が私を生かしていることを思い起こさせてくれるからです。

「人を大切にすること」とは、そのような大いなる力の、いのちの尊さの前に深く思いを馳せ、小さき人間として目の前の人のいのちの呼び声にできる限りの力を尽くすことであると思います。

以上で本日のお伝えしたいことを終ります。お聞きくださってありがとうございました。

2017年11月2日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川校地「講演」記録